

「いつでもすべてのものは現在にある」とはどういうことか？

山名 諒 (Ryo Yamana)

京都大学

恐竜はかつて存在した。化石などの証拠からほとんどの人がこのことを認めている。また、恐竜はもはや存在しないという見解も大部分の人の同意を得られるだろう。では「かつて」とか「もはや」抜きに、つまり端的に、恐竜は存在するのだろうか。この問いに「存在しない」と答えるのが、本発表で扱う「現在主義」と呼ばれる立場である。現在主義の存在論は、「存在するすべてのものは現在にある」（以降 (P) とする）、また「いつでも、存在するすべてのものは現在にある」（以降 (PA) とする）と表現される。本発表では、(PA) に対して現在主義者が望むような解釈を与えることができない理由を説明する。

かねてより現在主義に対してその定式化に関する問題が指摘されてきた。その問題とは、(P) に登場する「存在する」をどのように理解しようとも、(P) は自明に真であるか、明らかに偽であるかのどちらかであるというものである (Crisp 2004, Meyer 2005)。存在概念の解釈の候補は (1) 「今存在する」、(2) 「かつて存在した、または今存在する、またはこれから存在するだろう」、(3) 「端的に存在する」の三つがあり、それぞれの解釈のもとで (P) は (P1) 「今存在するすべてのものは現在にある」、(P2) 「かつて存在した、または今存在する、またはこれから存在するだろうすべてのものは現在にある」、(P3) 「端的に存在するすべてのものは現在にある」と表されることになる。現在主義の批判者によれば、(P1) は自明に真であり、(P2) には明らかな反例があるため偽であり、また (P2) が偽なら (P3) も偽となるので、いずれにせよ現在主義は有意味な主張にはならない。

本発表ではまず、この自明性の問題を解決するために現在主義者は (3) の解釈をとる必要があることを、Crisp (2004) の解決策を批判的に検討することで確認する。次に、(PA) に対しても自明性の問題が成立することを指摘し、(PA) は上記のいずれの解釈のもとでも有意味な主張にならない理由を説明する。最後に、「すべてのものは現在にある」といつでも語ることもできるにもかかわらず、「いつでも、すべてのものは現在にある」と語ることはできないという点に注目し、現在主義を主張すること自体の困難を指摘する。

参考文献

Crisp, T. M. (2004) "On Presentism and Triviality," in D. W. Zimmerman (eds.), *Oxford Studies in Metaphysics*, Vol. 1, Oxford: Clarendon Press, 15-20.

Meyer, U. (2005) "Presentist's Dilemma," *Philosophical Studies* 122: 213-25.